慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フリッツ・ クムプフ著 レーニンの帝国主義分析における弁証法の諸問題 : 弁証法的論理学のための一研究
Sub Title	Fritz Kumpf, Probleme der Dialektik in Lenins Imperialismus-Analyse, Eine Studie zur Dialektischen Logik
Author	倉田, 稔
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.10 (1968. 10) ,p.1110(104)- 1114(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19681001-0104
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19681001-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ない。その点で、ここに取上げた書誌は、極めてすぐれた一つの標本と見なされる。

（文学部　図書館・情報学科　藤川正信）

フリッツ・クムプフ著

『レーニンの帝国主義分析における弁証法の諸問題——弁証法的論理学のための一研究——』

Fritz Kumpf: Probleme der Dialektik in Lenins Imperialismus-Analyse. Eine Studie zur Dialektischen Logik.
Veb Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin 1968 1. Aufl. 212 S.

倉田　稔

一

マルクス主義＝レーニン主義の基本的諸性格の一つは、それが弁証法的であるという点にある。だからその経済学説も弁証法的であり、マルクスの主著『資本』もその観点からの研究が行われた。※

※この点については、ソ連邦におけるローゼンタール、日本における三枝博音、梯明秀、見田石介、諸氏等の諸研究がある。

レーニン『帝国主義』について、その理論的性格を論じたものとして、最近は、多くの諸論文がある。とくに、原田三郎「帝国主義コンメンタール」（『経済セミナー』一九六二年四月——一九六三年三月号所収）、南克巳「「資本論」体系の発展としての『帝国主義論』」（『マルクス経済学体系』第三巻「帝国主義論」所収、有斐閣、一九六六年）、本間要一郎「『帝国主義論』における「独占」の概念」（『思想』一九六七年五月）、金子ハルオ「『資本論』の創造的発展としての『帝国主義論』」（『経済』一九六七年一二月特大号）、そして、入江節次郎著『帝国主義論序説』（ミネルヴァ書房、一九六七年）等である。

しかし、『帝国主義』を弁証法論理学の立場から真正面にとり組んだ研究は殆んどなかった。本書は、東ドイツにおけるその一つの試みである。

二

本書は、次の三章から成っている。

第一章　弁証法的論理学の対象規定

第二章　弁証法的論理学の観点によるレーニンの帝国主義分析における科学的概念形成

第三章　帝国主義の社会体制の弁証法的把握と主体—客体—諸関係の二・三の局面

第一章は、本書の導入部をなし、副題である「弁証法的論理学」が考察されている。これには特別の限定が与えられている。というのは、著者は主に現代ソ連邦の哲学上の諸研究を二つの流れに整理し、一方が弁証法と弁証法的論理学とを区別するもの、他方は一致させるもの、とに区分し、著者は前者に立つ。ここに言う「弁証法」は、事物の論理（＝客観的弁証法）で、「弁証法的論理学」は、概念の論理学である。これは表現は異なるが、寺沢恒信氏の『弁証法的論理学試論』（大月書店、一九五七年）と発想の上で一つの共通性をもつ。

この「弁証法的論理学」は、分析と総合、抽象と具体、論理的・歴史的方法、普遍と特殊、上向と下向、がその内容である。

第二章では、これらの弁証法的諸カテゴリーによって、レーニンの帝国主義を体系的に把握しようとしている。そして、八節から成っているが、以下の三点が重要な論点である。1、理論的研究の出発点。2、出発のカテゴリーから他の諸規定への移行、本質から現象への移行。3、矛盾の役割、矛盾がどのような発展をするか、上向の過程におけるその役割。

まず、第1点。「理論的分析の、即ち抽象から具体への上向の決定的な問題の一つ」は、出発点の問題であるとし（S.90.）、その問題が論じられる。

出発のカテゴリーは、単純な、直接的な、無媒介的な、即ち、与えられた体系（＝帝国主義の体系）の枠内で他の何物にも媒介されない規定を含む抽象物である。だから「レーニンは、彼の分析を独占の分析を以って始めた。」出発のカテゴリーとしての「独占」はこのような意味をもっている。そして、なお「独占」は、一つの具体的な抽象物であるとしている。というのは、独占は右のような意味で抽象物であるが、他方で、前提を持っているからである。もっともその諸前提は、勿論特殊の発展段階としての帝国主義の種々の要素にあるのではなく、資本主義一般の発展の中にある。又、それは独占以前の資本主義の諸規定を自らの中に含んでいる故に、それらとの関連では、一つの全く具体的なカテゴリーである、とする。

次に第2点、出発のカテゴリーは、他の諸規定への移行の可能性と必然性とをその中に包含しなければならない、ということが論じられる。

独占は、帝国主義の体系において、他の諸規定への移行とその体系的な発展を必然的に自らの中に含むような具体的抽象物である。移行の必然性は、独占が帝国主義の経済的本質を表示することにある。

産業資本における独占の分析の後、レーニンは銀行資本を研究した。研究の論理が、この移行を要求している。即ち、銀行業の集積は産業の集積を前提している。だから銀行資本ははじめに抽象的に取扱った独占よりもより具体的なカテゴリーである。

金融資本の概念の内容も、レーニンの有名な定義※に見出すことができるように、そこに含まれた諸カテゴリー、そしてこの諸カテゴリーを結びつけた構造によって与えられる。

※「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着——これが金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である。」（岩波文庫版、七八ページ）

これは、明らかに、抽象から具体への上向の結果として認められる。先行した諸カテゴリー（生産の集積、独占、……）より具体的なカテゴリーであり、それらの総合からなりたっている。

レーニンは、金融資本において達した具体性の段階から、帝国主義のより一層具体的な諸規定へ上向した。資本輸出、領土分割等。そこでは各々のカテゴリーは、それに先行する諸カテゴリーを自らの中に含んでいる為、より具体的である。

最後に、『帝国主義』では、分析が二つの大きな領域、1、帝国主義の経済的基礎の研究、2、その諸局面に基づいた政治的・イデオロギー的諸関係の分析に分れている。この経済的基礎からイデオロギー的諸関係への上向は、史的唯物論と科学的上向法によって要求される。

最後に、第3点、について見てみる。

マルクスやレーニンによって、矛盾の弁証法は、理論的研究における論理的原理として使用された。レーニンによって、帝国主義のあらゆる諸矛盾は資本主義の根本矛盾から引き出された。ここでは、それの一層の発展した矛盾が問題である。それは、生産の社会化の新しい段階と私的資本主義的取得との間の矛盾として、独占と競争との間の矛盾として、現われる。まさにこの矛盾が、帝国主義の個々の諸契機の形成や、その内的運動にとっての、また帝国主義の発展の全方向の規定にとっての、推進契機なのである。その際、各々の矛盾は一つの共通の基礎から展開されるのであって、契機が研究の行程において〝外〟から入ってくるのではない。マルクスにおいては、商品とその矛盾、レーニンにおいては独占とその矛盾がその出発点である、とする。

まずこの矛盾が、銀行資本の領域でその具体化を見る。生産諸力の発展の結果である生産の集積は、増大する規模で、生産手段の社会的管理を要求する。銀行は、その形態からして生産手段の社会的管理の用具である。だが銀行資本は単に与えられた体系の枠内での部分的解決である。だからまさに一層高い段階での、より大なる鋭さの矛盾が問題である。独占と〔商品生産と私的所有という〕一般的環境との矛盾の中に金融資本の形成の根拠がある。依然として変らぬ社会的根本構造における、この矛盾の解決が、生産の社会化の特殊な形式としての金融寡頭制支配の形成である。

金融資本は、新しい矛盾をつくる。資本所有と、生産への資本使用との間の矛盾である。これを解決するために資本輸出の契機が生ずる。

この契機を基礎に、帝国主義的植民政策が生じてくる。

資本所有と資本使用との分離が大規模に拡大されると、金融的権力を持ったいくつかの国家が選り出されてくる。ここから、帝国主義列強の寄生性および一層の矛盾が生ずる。一方では、資本輸出諸国の発展が資本輸出の作用で抑制されることと全世界の資本主義の一層の発展の拡大と深化との矛盾、他方では、資本輸出が独占的諸団体の間で根本的矛盾をつくる。これらの諸矛盾を基礎にして、帝国主義列強の間の矛盾が生れる。これは帝国主義戦争をひき起す。

最後に、レーニンは独占を帝国主義の本質とみなし、全体系の展開は、本質から現象へ展開するとし、資本輸出、経済的・領土的世界分割のような帝国主義の個々の諸要素は、独占の特殊な現象形態であるとみたと述べられている。

第三章は、二節から成っていて補論をなしており、第一・二章と直接関係をもたない。社会的諸現象は、常に主体的そして客体的諸契機の統一を含んでいる。そのため、主体的なものと客体的なものとの媒介の諸問題が、とくに史的唯物論においては重要であり、この観点から、第一節でカウツキーの批判がなされ、第二節で国家独占資本主義について論じられているが、充分成功していないと思われる。

三

まず個々の問題点を考察しよう。

出発のカテゴリーとしての「独占」の性質が、一つの具体的な抽象物である、とされているが、これは正しい指摘であろう。日本でも、「独占」は具体的な概念であるとか、抽象的であるとか、論じられているが、単にどちらか一方であるという二者択一の問題ではない。なお、これと共に、独占以前の資本主義の諸規定と独占との関係が問題にされねばならないが、この点は詳論されていない。日本では、戦後、宇野弘蔵氏のマルクス批判、レーニン批判が行われ、その反批判という問題意識があって少からず研究されているが、東独ではそれがないからであろう。この関連、又は、『資本』と『帝国主義』との理論的関連を弁証法的論理学の諸カテゴリーによって規定する作業が、これからの一つの課題である。

本書の最大の問題点は、「上向法」である。この点では、日本では、南氏論文等に共通性を見出しうる。本問氏は、南氏達が『資本論』の上向法が『帝国主義論』での「独占」概念の展開に再現されているという解釈であるとし、「しかし、いわれるような意味でのげんみつな上向法体系としてわり切るのは、『資本論』の方法からの性急な類推であるように思われる。」（前掲論文一三六ページ）といわれる。ところが本書ではまさに、『帝国主義』がげんみつな上向法的体系を持つものとして、終始一貫取扱かわれている。上向法的体系をなすという点では、『資本』と『帝国主義』とは一つの共通性をもつと考えられるが、機械的に同じと見做しては誤りであろう。本書はその点でいくらか機械的にすぎる点がある。マルクスは商品とその矛盾、レーニンは独占とその矛盾から始めた、と論じているが、それを殆んど差異がないように取扱っている。しかし、商品と独占とは、その端緒としての性格に差異がある。商品から貨幣、さらに資本への展開は、抽象から具体への展開である。また、独占からの展開も、著者の言うように抽象から具体への展開であることは間違いないとしても、むしろ、『資本』の第一巻「資本の生産過程」と第二巻「資本の流通過程」との統一として、第三巻「……総過程」があるのと同じように、『帝国主義』第一章と第二章との統一として第三章があるという構成を持っている、と考えられる。

なお、疑問とされるのは、本書中で、出発点としての「独占」を、「レーニンはその抽象的な純粋性において受取った。我々は、研究

対象の理念化 Idealisierung の一定の形式が問題である」(S. 107) としている点である。ヴェーバーのいう理念とはもちろん異なるであろうが、本書の叙述が機械的な傾向を持つことにかかわりがあるように思われる。

本書では、一国を超える世界的・国際関係は、詳細に論じられていない、というより力点を置かれていない。

上向法に立って論ずる際に、国内的経済諸関係の規定の展開と、国際的なそれの展開との間に差異があるであろう。本書はそれについて論じていないが、今後の我々の問題として在る。

本書は、第二章が注目されるべき部分であり、叙述の進行と共に、レーニンと同時代の多くの論者に対する批判が論旨展開に即して行われている。例えば、オットー・バウァーの帝国主義の定義「諸国民の種々の拡張努力」を紹介し、帝国主義を把握するということは、体系をそれに内在する構造において、個々の諸契機をその内的関連において把むことであるから、そのようにたんに一定の帝国主義列強が示す共通の指標を探すことではない、としている。これはカウツキーにもあてはまるものであるが、本質から出発しないで現象の個々の契機にとらわれた結果であるとしている。要するに、諸事実を全体系において把握すること、全現象の弁証法的把握の必要性と正当性とを述べ、内容としては、独占からの出発を批判の根拠としている。これは説得的である。

著者の基本的立場というのは、抽象から具体への弁証法的上向法は、本質と現象の弁証法的諸関係の最も適した把握法である、ということにある。

この方法は、具体的に使用する際に困難があるけれども、一般的には正しい。そして本書の価値は、殆んど初めてのこれの体系的試みであるという点にある。その為、帝国主義の諸契機・諸カテゴリーを、「弁証法的論理学」によって体系的に把握したこの成果を汲みとるべきである。しかし、具体的にその方法を使用する際――と今述べたが――の不十分ないくつかの点を認め得る。これは、マルクスは論理学の書物を書かなかったけれども『資本』という論理学を書いた、と言われるが、レーニンの『帝国主義』は、何としても、その論理学的性格、厳密性において、『資本』と較べて意識的ではない、ということに関係している。レーニンが『帝国主義』を書く時、どの程度、弁証法を意識して書いたかを確認しておかないと、機械的なあてはめを行ってしまうおそれが生ずる。

本書は、そのようなおそれを持ちながらも、帝国主義研究の為の方法に、多くの考えねばならない問題を提出している。本書はレーニンの労作の叙述方法と構成との理解を推し進める上で一つの寄与をなすであろう。